

千葉市立郷土博物館のあり方（骨子）

I 郷土博物館の現状と課題

【ハード面】

- 土地面積計 8, 748.59 m²、床延面積 2, 416.29 m²と必要な展示スペースや収蔵庫、市民のための研修室、資料閲覧室、学芸員の研究室、会議室などが十分でないまま現在に至っている。
- 全館空調、風除機能への対応は急務である。また雨漏りその他（唇脚類など多足類の発生）維持管理に課題がある。
- 収蔵庫が手狭になり、収蔵環境も不十分である。博物館活動の大きな柱の一つである資料の収集・保存が懸念される状況が続いている。
- 資料閲覧スペースなどの狭隘の他、防犯カメラなどの「安全・安心」に関する対応が検討されていない。

【ソフト面】

- 多彩な歴史的観光資源や千葉らしさを観光客（外国人を含む）に伝える手段として、郷土博物館の展示・収蔵資料、各種体験イベント等の活用が重要である。小中学生、歴史ファンや中高年層などの学習意欲を満たす「学習観光」が重視される傾向があることから、それへの対応が求められる。
- 観覧者（観客）のそれぞれの年齢や属性にあわせた「学習と観光の両立」などをはじめ、さまざまな世代がそれぞれの興味で博物館を利活用できるようにするために、展示そのものの情報提供、発信のあり方や演出の手法など、検討していくことが重要である。

《検討課題》

- 現状の問題点について（「展示機能」「教育プログラム」などの観点から）
- 資料不足により、「魅力に乏しい展示」という意見を踏まえた今後の展示について
- デジタル資料等の一層の活用、吹き抜け構造を生かした展示等について

意見聴取

主な委員意見

主な委員意見	

II 郷土博物館が果たしてきた役割（これからの博物館として継続する理念）

郷土博物館は、

- 市民の共有財産である歴史資料の保存・継承、調査・研究、活用を通じて、市民や利用者にとって、千葉市の歴史に親しみ、学べる拠点として機能してきました。
- 児童生徒の歴史体験の拠点として、また、市民の生涯学習活動の場として機能してきました。
- 郷土博物館における歴史体験を通じて、市民一人一人の中に、本市に対する誇りと愛着が育まれることをめざしてきました。
- 研究者や観光客の利用も視野に入れた活動を行い、千葉市の歴史に関する調査・研究の進展や、市への親しみやイメージアップの促進に寄与してきました。

《検討課題》

- 自己評価資料に基づく、施設開放の程度、研究機能の評価、教育普及活動について
- 千葉市都市アイデンティティ戦略との関連について

めざす博物館像

- 千葉氏に関する情報や千葉市の文化の特徴を明らかにし、地域の発展に役立つ拠点をめざします。
- 新たな調査・研究を提案し、その成果を発信する博物館をめざします。
- 市民・利用者が集い、憩い、千葉市を愛し誇りとする拠りどころが得られる博物館をめざします。

III 基本方針と今後5年の「中期計画」(案)策定指針

□学芸 ■市史

【市民に開かれた博物館に】

- 郷土博物館における歴史体験を通じて、本市への誇りと愛着が育まれることをめざします。
- 市史編さん事業と関連付け、地域や全国に散在する千葉市に関する資料を調査し、研究を進める中心的な役割を果たします。
- 国際化に対応した館内案内、説明を工夫します。

【千葉氏及び次世代への歴史資料の継承を】

- 千葉氏に関する研究機関としての資料調査、集積などを進めます。
- 市民に対して伝統文化を体験するための機会を提供し、貴重な文化財を未来に伝え残します。

【学芸員等の活動が「見える」博物館に】

- ボランティアをはじめ、市民参加による郷土博物館の企画・運営を積極的に進め、市民が自分の住む地域の歴史を大切に、体験講座・歴史案内などを通して学んでいけるよう貢献します。
- 児童生徒や市民が郷土博物館で本物の歴史資料に触れ、歴史体験をすることにより、学校、生涯教育の場で提供される学びとは異なる「新たな学びと遊び」の場を創出します。
- 学校教育との密接な連携を図り、郷土博物館における体験が有効に働くよう配慮します。

参考資料：博物館の設置及び運営上の望ましい基準（平成 23 年 12 月 20 日 文部科学省告示第 165 号）
「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」報告書（平成 22 年 3 月）
博物館の原則 博物館関係者の行動規範（日本博物館協会）（平成 24 年 7 月）

IV 「中期計画」(案)の視点

- (1) 基礎的・探究的な調査研究の成果の発信
- (2) 常設展、企画展の活性化
- (3) 収蔵品の貸借、保有資産の有効利用
- (4) 教育普及の充実
- (5) ボランティア活動への支援
- (6) 施設的环境整備、環境の向上
- (7) 情報の発信と広報の充実
- (8) 文化財の管理と次世代への継承
- (9) パークマネジメントなどへの挑戦
- (10) 研究交流の実施
- (11) 運営の効率化

意見聴取

主な委員意見	

V 事業方針：

(市史編集事業、博物館学芸事業を通して、歴史資料の保存・活用をより有効なものとする)

□学芸 ■市史

(1) 基礎的・探究的な調査研究の成果の発信

〈調査・研究活動〉

- 調査・研究にあたっては、学芸員の独自活動を強化するほか、研究者、郷土史家、市民、児童生徒、学生の参画を得て、実施する。
- 千葉市史編さんについては、継続して補助執行として博物館が事務を担う。
- 調査・研究にあたっては、中世、戦国期から近世、近現代にかけての千葉市を特徴づける歴史、近代産業史等を一つの柱とする。
- これまでの調査・研究活動を継承しながら、新たな調査・研究テーマを設け、文書資料から千葉市らしさを明らかにする。
- 千葉は、歴史・民俗という観点からも特徴的であり、自ら生まれ、あるいは生活する身近な場である郷土を深く知ろうとする市民にとって大きな魅力を有している。「ローカルカラー」(千葉市らしさ)を前面に出し、市民の郷土学習・学術活動の支援を今後も充実させる。

(2) 常設展、企画展の活性化

〈展示活動〉

- 千葉市らしさを表現する「常設展示」と、常設展とは異なる視点から「千葉市の歴史」に焦点を当てた「企画展示」を行う。
- 常設展示は、「楽しく分かりやすい体験展示」の場を設け、郷土の歴史に親しみと誇りが感じられる展示の実現に努める。
- 貴重な古文書などの一般公開に際して、原本の状態を保持しつつ、展示への要望に応える。
- 収蔵品を中心とした企画展や、市民所蔵の資料等を活用した企画展なども実施し、リピーターの確保と新規観覧者(観客)者の開拓に努める。
- 千葉市が有する歴史資料は多様な形態を持っている。こうした資料はその総体として市の歴史を示すものであり、一元的、一体的に保存・利活用することが望ましい。
- 地域の文化資源をどのように調査・研究しているのか、また収集された資料(素資料)がどのように博物館の資料になっていくのかなど、学芸員の行っている諸活動があまり知られていない。顔の見える学芸員の活動を通して博物館の魅力を発信する。
- 博物館の「バックヤード」で行われている活動の成果が展示に反映されていることを市民に伝えられるような常設展示の構成をめざす。

⇒当博物館の基本的性格として「千葉氏」を柱の一つとしながら、「近現代までの歴史博物館」とする。

(3) 収蔵品の貸借、保有資産の有効利用

- 古文書など文書資料については保存機能、発掘される遺物などについては文化財保存活用（文化財課等）と連携、分担を図りながら、効率的な収集・保存活動を行う。
- アウトリーチ事業として、学校への展示出張などの活動を展開し、学校のみならず、他博物館などとの連携、商業施設との連携により、千葉市の学術資料の魅力に触れる機会を創出していく。
- Webページによる史料の発信など非来館者へのアプローチの形態を多様に検討する。

(4) 教育普及の充実

〈学習・体験活動〉 → 【市民や子どもたちの思いに応える博物館に】

- 歴史講座・講演会、体験講座等を開催し、地域への興味を喚起するとともに、郷土の価値の再発見を促す。
- 古文書を読み解く講座をはじめ、古文書から分かる歴史講座などを実施し、古文書に親しむ活動を展開する。
- より知りたい、調べたいという児童生徒や市民が、自主的に学べるスペースや環境を整えるとともに、職員やボランティアによるサポートなど人による学習支援の充実に配慮する。
- フィールド活用等のツアーや出前講座などを実施し、館外においても千葉市の魅力を広める。
- 郷土博物館が有する資料を基盤として、これまでも取り組まれてきたレファレンス活動をより充実させる。また、疑問から新たな疑問や課題の発見につながるような「興味の持続」や「課題発見型」の学習などの視点による展示や教育普及プログラムの開発を図る。
- 子どもたちの夏休み期間にあわせて展開する「夏休み体験博物館：博物館の裏側を見せます（バックヤードツアー）」「ボランティア解説員による歴史講座」など、身近な視点や歴史的事実から、博物館資料を通じて子どもたちの知的好奇心を刺激する教育普及活動を充実させる。郷土博物館が有する資料をもとに、子どもたちの素朴な疑問や、学習における課題などに対応できる活動をめざす。

(5) ボランティア活動への支援

- ボランティア団体やさまざまな分野に及び同好会とともに調査・研究、教育・普及活動を展開し、市民参加による博物館活動を発展・充実させる。
- 子どもたちや市民の学習成果を発表する機会の充実など、博物館展示をより豊かにするきっかけの一つとすることなどもめざす。また市民参加によるワークショッププログラムの作成などを試みる。
- 市外、国外からの来館者等も期待できる観光資源として、また東京オリンピックに應じる「スマホ」発信などを行う。

(6) 施設的环境整備、環境の向上

〈学習者、利用者サービス〉

- 観覧者（観客）が利用しやすく、快適に過ごせるように、施設環境を整える。
- ■職員やボランティアによる対応に努め、親しみのもてる施設とする。
- 郷土博物館が発行する書籍や来館記念となるミュージアムグッズを検討し、市民の学習意欲に応えるとともに、来館記念の持ち帰り等のニーズに応える。
- 整理・調査・研究は博物館の根幹ともいえる重要な活動である。また、増え続ける資料を収蔵し、それらを十分に調査・研究するための物理的な空間の拡大・充実は大きな課題である。現在地の郷土博物館のもつ好立地条件を考慮しながら、有効な方策をはかっていく。
- 親と子がともに楽しめる仕組みや活動を充実させるとともに、世代間交流をテーマとした展示体験プログラムなどの開発をはかる。親・子・孫の3世代が博物館での学びの機会を持てるような展望を描く（⇒ 第5次生涯学習推進計画の施策体系にかかわる事業関連）。

〈環境の向上〉

- ■現状の博物館は収蔵能力を超えようとしている。今後、施設では収蔵庫環境の改善をはかる必要がある。温湿度管理が可能なシステムを備え、資料の適性に合わせた環境、多様な資料形態に対応できるような収蔵設備を整えることをめざす。
- ■分散管理している「史料」その他の一元管理できる設備の確保をめざす。
- ■写真撮影室や資料燻蒸室などの充実を図っていくことを検討する。収蔵庫は博物館の歴史を物語るものであり、魅力を伝える格好の場でもある。収蔵庫の一部可視化などバックヤードの魅力発信も検討する。
- ■調査研究機能、収集機能、収蔵機能の施設については、統廃合校の活用も視野に入れ、既存の加曽利貝塚博物館、埋蔵文化財調査センター施設との合理的・効率的な距離に立地することを検討する。
- すべての利用者にとって安全で快適な空間となるよう、ユニバーサルデザインの取り組みを行う。
- 施設の整備にあたり、合理的・効率的な構造と適切な維持管理により、施設長寿命化と修繕費を含むライフサイクルコストの軽減をめざす。
- 休憩スペース、資料閲覧スペースを適切に設けるなど、利用者が心地よく過ごすことのできる空間づくりとする。

⇒ 1階から4階までは保存効果を高めるために閉鎖（風除）空間とするとともに、狭隘なスペースの拡張を図る。

(7) 情報の発信と広報の充実

〈情報発信活動〉

- ■常設展示スペース内に、展示を補完する「デジタルミュージアムコーナー」を設けるなど、千葉市の埋蔵文化財や歴史資料、祭りに関する画像、情報、映像などをいつでも見られるように公開する。
- Webを活用したミュージアム、アーカイブ機能を生かし発信する。
- 市内の歴史・観光情報を提供する「フィールドミュージアム」、観覧者（観客）を市内散策へ誘うサービス、郷土博物館の成立を紹介するサービスを行う（エントランス機能）。

(8) 文化財の管理と次世代への継承

〈収集・保存活動〉

- 主に実物を中心とした歴史資料の収集・保存を担い、市民などの所蔵者の協力を得て進める。
- 高齢化の中で、資料の寄贈が急増する中、資料に関するデータの記録、保存する。作成した資料情報をもとに、データベースを構築し、効率的な利活用の対応ができるようにする。

(9) パークマネジメントなどへの挑戦

【千葉文化の森】の一体的構想と連携

- 新たな博物館を検討するにあたり、市の発展の中心に位置づく「亥鼻公園」「千葉神社」などの千葉氏関連史跡と一体的に活用し、フィールドミュージアムとして「学習観光」に寄与することをめざす。
 - 千葉神社や亥鼻城とその門前町の整備など周辺との一体的な整備を行い、周辺施設との相互利用を想定し、回遊動線のあり方などを再検討する。
 - 植栽などを計画的に行い、公園と一体になった「憩い」の場とするよう、関係課の協力を促進する。「第3の場」として、市民に日常的に利用され、乳幼児の親子連れから、休憩に訪れた高齢の方まで、世代を超えた幅広い人々が交流できる空間とすることが望ましい。
 - 猪鼻城址を中心に、歴史的観光資源や千葉らしさを観光客に伝える手段として、「学習観光」を重視し、郷土博物館も対応を図る。
 - 市民ギャラリーなど市民参画の展示企画を設ける。
- ➡ **新たな博物館を検討するにあたり、市の発展の中心に位置づく「亥鼻公園」「千葉神社」などの千葉氏関連史跡と一体的に利活用するために郷土博物館機能は現在地に置くことが望ましい。**

(10) 研究交流の実施

〈情報発信活動〉

- 博物館は講座をはじめとするさまざまな活動を行ない、「開放型の博物館」としての実績を重ねてきた。ワークショップルームや研修室を中心とした体験空間を設け、レファランスマ機能や研修機能の充実をはかる。より知りたい、調べたいという児童生徒や市民が、自主的に学べる史料閲覧スペースを整えるとともに、アドバイスなど人による学習支援の充実に配慮する。

(11) 運営の効率化

- 学芸員は、博物館法に定められている事業の他、児童生徒期から社会人にいたるあらゆる層に対して専門的な教授能力を有する立場にいる。教授能力に対する適正な人事評価を行うことが千葉市の文化行政の発展に資する。
- 郷土博物館の事業である千葉市の歴史・民俗の調査研究とその継承、及び市史の編纂については、歴史認識の客観性が求められることに加え、継続的・安定的に進められるべきものであることから、市の直営とする。指定管理を検討する場合は、郷土博物館の維持管理、展示等の運営、市民参画事業についてのみと考えるべきである。